

コンピュータと応用倫理学

越智 貢

はじめに

1. 応用倫理学の位置
2. モラルの条件
3. 「作る倫理」

はじめに

近年、「バイオ・エシックス」「エンバイロンメンタル・エシックス」「ビジネス・エシックス」などの「応用倫理学 applied ethics」が注目を浴びている。これら応用倫理学の中に、「コンピュータ・エシックス」と名付けられた領域がある。

電子的な情報メディア、とりわけコンピュータの普及は、モラルの領域でも大きな問題を引き起こした。80年代に新聞紙上を賑わせたハッカーの問題やコンピュータ犯罪の横行は記憶に新しい。こうした社会的背景のもとに、80年代半ばに市民権をえたのが、「コンピュータ・エシックス」という用語である。

以下では、コンピュータ・エシックスを手がかりにして、応用倫理学に関わる諸問題の一端を考察する。

1. 応用倫理学の位置

モラルはつねに変化を遂げてきた。戦前のモラルと戦後のモラルとが同じではないように、現在もわれわれのモラルはたえず変容を遂げている。応用倫理学もこの変容の歴史とつながっている。

ただ、静かに見える変容とはいえ、その水面下にはかつてない大きなうねりを伴っているように思われる。少なくとも、今日のモラルがひどくアンビバレントな位置におかれていることを見のがすべきではないだろう。

いわゆる伝統的なモラルは確実に衰退の道を迎っている。かつてモラルと密接な関係にあるとされた言葉の多くが、いつしか死語としての扱いに甘んじるようになった。愛、感謝、尊敬、徳などは、限られた範囲を除けば、もはやモラルを支える言葉としては通用していない。それどころか、多くの論者が指摘しているように、相対主義的な価値観の支配がモラルの領域にも及んでおり、モラルの実質的な力とその守備範囲は日ごとに失われているように見受けられる。

だが他方で、その現象と並行して、モラルに熱いラブコールが寄せられている領域がある。医療、環境、企業行為などに関するモラルの基準の解明と確立が切実な社会的要請となりはじめ、それらの分野で活発な議論が交わされた。これらの議論からバイオ・エシックスやエンパイロメンタル・エシックスなどが芽生えてくる。コンピュータ・エシックスも例外ではない。これら応用倫理学が、伝統的なモラルと離れたところから、アカデミックな研究者が予想だにしない仕方で生まれてきたことを忘れてはならないだろう。

こうして、モラルの現在は衰退と隆盛という矛盾しあう評価の間で揺れているように見える。モラルの変容の姿が見通しにくい理由の一つはここにある。

このアンビバレントな状況をもたらした事情は複雑であるにちがいない。だが、少なくともその主因の一つがテクノロジーの存在にあることを見逃してはならない。伝統的モラルの衰退には、政治経済的な要因と並んで、テクノロジーの開発とそれによる生活様式の変化が絡んでいる。新しいエシックスの出現もやはりテクノロジーの高度な発展と直接結びついている。テクノロジーはこれまでもちえなかった力をわれわれに与えたが、この力はわれわれの責任の範囲を時間的にも空間的にも飛躍的に拡大した。応用倫理学という、さまざまな「エシックスの氾濫」は、それぞれの問題圏の側からそうした状況に対応しようとするモラルを模索する営みだといっている。この意味では、コンピュータ・エシックスは応用倫理学の最先端に位置していることになる。

2. モラルの条件

コンピュータ・エシックスの問題としてしばしばとりあげられるのは、たと

例えば、ソフトウェアのコピーは盗みか、ハッカー行為は犯罪か、ウィルス作成は破壊行為か、個人情報の蓄積はプライバシー侵害か、コンピュータの誤動作やプログラムのエラーの責任はどこにあるか、などといった問題群である。

これらの問題は、これまでの伝統的なエシックスの立場でたやすく解決できる問題だと思われるかもしれない。事実、コンピュータが介在するにせよしないにせよ、盗みはいかなる場合でも盗みであり、破壊は破壊、責任は責任だと主張する研究者もないではない。そうした研究者は、伝統的なモラルの原理をコンピュータが引き起こす諸問題に何らかの仕方で「応用」しようと考えている。

だが、はたして、単純にそう言い切ることができるだろうか。コンピュータ犯罪をはじめとするこれらの問題は伝統的なモラルの原理をコンピュータ環境に対して応用することで解決できるのだろうか。そうは考えられない事例がある。

たとえば、周知の「所有」や「所有権」の問題。この問題一つとっても、伝統的なモラルのコンテキストにそのままではおさめることのできない複雑さが認められる。なぜなら、デジタルの世界では、オリジナルの保有が所有を保証する前提とはなりえないからである。伝統的なモラルの世界に、コピーとオリジナルの区別がつかない世界は含まれない。

コンピュータの世界では、「判断」という当たり前の行為さえ意味が変わる。意志決定プログラムは、人間の判断能力を拡大し、人間には不可能な速度と射程範囲で判断の選択肢を予測する。だがそうなれば、判断の主体とその責任の所在はどこにあるのか。この判断によって重大な事故が生じた場合、そのモラル上の責任はどこに求められるのか。伝統的なモラルの原理が、コンピュータに依存することでしか下せない判断の責任を特定できるとは思われない。

こうしたことは、これまで常識化され自明な意味をもつとされてきた多くの言葉にあてはまるだろう。つまり、さまざまな領域で労働効率や計算効率を高めるために補助手段として導入されたコンピュータが、逆に人間の行為の意味を再考し再解釈することを迫っていることになる。ここにはいかなる事態が潜んでいるのか。

問題はむろん単純ではないだろう。ただ少なくともここで注目する必要がある

と思われるのは、モラルの判定にとってコンピュータの介在が付随的な条件ではなく、むしろ本質的な条件となっていること、すなわちコンピュータそれ自身がモラルの新たなコンテクストになっていることである。コンピュータの社会的浸透がそれらの言葉の自明性を支える諸条件を変えたと言い替えてもいい。

このことは、とりわけ時間空間的な条件についてあてはまるように思われる。これまでのモラルでは、長い歴史にわたって、人間対人間の関係しかも対面的（face to face）な公共性における人間対人間の関係が問題にされてきた。それゆえ、時間的にも空間的にもモラルはわれわれの力の及ぶ範囲で問題にされ、その範囲が越えられれば当該の問題は「偶然」や「運命」と呼ばれる脱モラルの領域に押し込まれた（Cf. H.Jonas）。つまり、時間空間的な制約が逆にモラルの安定性を維持し、その自明性を培う条件でもあったと見ることができる。伝統的なエシックスが固執するモラルの原理とは、そうした歴史的「制約」＝「条件」にもとづく共同の想念だといっている。

だが、コンピュータが介在する世界では、こうした歴史的制約はたちどころに解体される。人間の力のはるかに強大になり、モラルも対面的な関係を逸脱する。先にコンピュータ・エシックスが必ずしも原理の応用を意味しないと述べたのはそのためである。つまり、コンピュータ・エシックスを応用の倫理学だと見なすことは、いわば対面性の枠組みをコンピュータの世界にもちこみ、ここにそのまま連動させようとする試みだということになる。

むしろ、コンピュータ・エシックスの出現には、言葉のそしてモラルの自明性を支える歴史的諸条件の解体ないし綻びという事態が先行していると言わなければならない。言い換えれば、ここで起こっているのは新たな自明性の創造のプロセスであり、その意味ではコンピュータ・エシックスの問題群はいわばモラルの生成の現場なのである。

たしかに現在、コンピュータ・エシックスの問題は特殊な領域でしか切実さを伴っていないといえるだろう。正直な人が同時にソフトの違法コピーに対しては無頓着でありうることも示されるように、現在におけるコンピュータのモラルはいわば「バイ・モラル」（モラルの二重性）の状況にあるともいえない。だが、やがてコンピュータ革命が安定期に近づくにつれ、新たな自

明性に支えられた新たなモラルがより鮮明な姿を示し始めることはまちがいない。

3. 「作る倫理」

コンピュータ・エシックスを問題にする際、今一つ忘れてはならないことがある。その守備範囲が人間一般ではなく、コンピュータに関わる限りでの人間だという点である。このことは、当然のこととはいえ重要である。なぜなら、このことにより、コンピュータ・エシックスがいわば普遍的倫理を問題としないことが内包されているからである。

コンピュータ・エシックスが「職業倫理」を強く意識しているのはそのためであり、またACMの「倫理綱領」ethical codeをはじめとして、コンピュータのプロのための綱領を制定することに熱心なものそのためである。コンピュータのプロは、ブラックボックスとしてのコンピュータの世界に人々が通常見ることのできないさまざまな足跡を残しうる。言い換えれば、彼ら自身の知識のために、コンピュータ犯罪の誘惑にもっとも晒されやすい。事実、コンピュータ犯罪の多くはコンピュータのプロによって引き起こされた。

倫理綱領の制定にも象徴的に示されているように、一般に職業倫理が「作る倫理」であることを忘れてはならないだろう。コンピュータ・エシックスと伝統的なモラルの原理ないしその解明を目指す伝統的倫理学との決定的な違いもここにある。なぜなら、後者は多くの場合「発見する倫理」(Cf.「法則」や「原理」の発見)の姿勢を守ってきたが、前者はどこまでも「作る倫理」(Cf.「規則」の制定)に固執せざるをえないからである。この点で、コンピュータ・エシックスの倫理綱領は、法律家の倫理綱領や医者綱領、さらにはジャーナリズムの倫理綱領などとそれほど変わるところはない。コンピュータ・エシックスの世界でも、超越論的な原理や超越的な原理は無用である。まして神が固有の場所を占めることはありえない。

ただ、コンピュータ・エシックスの場合、他の既成の綱領とは違って、倫理綱領の制定がそれほど容易ではない点に留意しなければならない。綱領の条文によって「コンピュータ・テクノロジーの倫理的使用のための方針」(J.H.

Moor)を明示しようとしても、先に指摘したように、モラルに関わる多くの言葉はコンピュータの世界ではすでに自明性の基盤を失っている。この方針を既成の自明な意味をもつ言葉で表現しうる可能性は大きくない。「革新的」テクノロジーの最先端に関わっているコンピュータ・エシックスが、ややもすると「保守的」とも映る慎重な姿勢を保とうとしているのは、そのことと無縁ではないように思われる。むしろ、この姿勢は今日の相対主義的な価値観の支配とも深く関係していよう。

さらに、コンピュータ・エシックスの場合には、他の既成の職業倫理と同じく具体的なモラルの指針を「作る」ことを目指すにしても、やや「作り」方が異質である点にも注意しなければならない。コンピュータ・エシックスでは、たいていコンピュータが果たしうる目的を検討し、それらのモラル上の意味を吟味するといった議論が多いように思われる。単純化すれば、次のようになる。

われわれはコンピュータ・システムをもっている
これは a. b. c. d 等々の目的を実現するだろう
一定の理由から、われわれは目的 a を選択する

この場合、結論部は規制という形でネガティブに示されることが多い。さまざまな倫理綱領の諸項目はその表現にはかならない。既成の究極的な原理に守られることなく、手探りでコンピュータ世界のモラルを追求していかざるをえない以上、コンピュータ・エシックスは予測される結果を比較しつつ「ベター」（「ベスト」ではなく）な方向を見いだす以外に方法がないともいえるだろう。だが、上記の推論の骨子が次のものと同じである点に注意しなければならない。

与えられた手段
それによって達成される諸目的の列挙
特定の目的の選択

この推論形式では、大前提に手段が、小前提にその手段が実現しうる種々の目的が置かれている。つまりこの推論では、目的の選択肢が手段の存在によっ

てあらかじめ決定されていることになる。目的の選択の制限は、いうまでもなく、われわれの自由の制限を意味している。

たとえば、まずどこに行くべきか、どこに行きたいかが決まっているのでなければ、本来、交通手段は考慮に入らないはずである。だが、この推論形式は、まず飛行機に乗ることを自明の前提として、それからどこに行けるかを考えていることとほぼ等しい。こうした議論に終始する限り、コンピュータやコンピュータ化された社会は自明な存在とならざるをえない。大前提にくる命題は、少なくとも推論の上では自明性を与えられるからである。言い換えれば、この論理からはコンピュータ資源の保護を目指す視点は出てきても、コンピュータ社会を越える視点、たとえばコンピュータ社会そのものを否定するような自由な視点は決して出てくることがないことになる。(＊)

(＊) [補足]

以上の主旨がコンピュータ・エシックスに特有のことではない点にはとくに注意する必要があるだろう。モラルの領域における「コンテキストの変容」は、「バイオ・エシックス」「エンバイロンメンタル・エシックス」などの応用倫理学全般において、同様に問題となっている。このことは、「作る倫理」についても当てはまる。種々の応用倫理学は決して「発見する倫理」ではない。しばしば重視される社会的コンセンサスは、倫理を「作る」ための手続きではあっても、特定の原理を「発見する」ための手続きではない。先の推論形式についても同じである。この推論形式は他の「氾濫するエシックス」全般に当てはまる。実際この形式は「技術社会の論理構造」を示すものとして、かつて今道友信氏が注目した「実践的推論」の形式を利用したものにはかならない。彼が指摘しているように、この種の推論はテクノロジーが支配する世界ではいたるところに見いだされる。これについては、P.リクール『現代の哲学II』（岩波書店）135頁以下を参照のこと。

最後に私見を述べておきたい。われわれの自由は、ある問いに対する答えとして特定の選択肢を選び出すことよりも、それに先んじて、特定の問いを立てること自体においていっそうよく発揮されるように思われる。その際、そうし

た問いそのものは、けっして先の推論形式からは出てこない点に注意しなければならない。つまり、それはむしろわれわれの生き方の問題（どのように生きたいか）から出てくる問いであり、それゆえ学的な手続き一般の限界を超えた問いでもある。歴史がそのことを教えてくれている。そもそもエシックスを生み出した学関心は、「いかに生きるべきか」（『ゴルギアス』）という問いとともに始まっていた。われわれは、このことを改めて確認しておく必要があるように思われる。

【付記】

本稿は、シンポジウム「情報社会の文化」（'94.11.21東京大学山上会館）での口頭報告（原題「コンピュータ・エシックスが示唆するもの」）を修正して論文の形にまとめ直したものである。

この論文をまとめる作業と並行しつつ、別の論文でコンピュータ・エシックスに関連する諸問題を検討する機会があった（拙論「情報と倫理」加藤・松山編『現代世界と倫理』昭和堂1995所収）。参照願えれば幸いである。

Computer and Applied Ethics

Mitsugu OCHI

With this essay I treat some problems raised by the new developments in science and technology, that is, those about Computer Ethics to show how and how far Applied Ethics differs from traditional ethics.

I take up backgrounds on which Computer Ethics rests, particularly historical conditions of morality. Differences of conditions in time and space explain how Computer Ethics and Applied Ethics are not any traditional ethics <applied > in concrete cases.

But I also investigate the normative reasoning in Computer Ethics and show how the features of that reasoning relate to our moral freedom. They seem, to me, to influence the <conservative>character of Computer Ethics.